

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院大腸外科での国内外科研修を終えて

水戸医療センター外科

伊瀬谷 和輝

この度、令和6年度日本臨床外科学会の国内外科研修プログラムにより2024年8月26日～9月8日までの2週間、がん研有明病院大腸外科で研修をさせていただく機会を頂戴いたしましたので、ご報告させていただきます。私は自治医科大学を卒業後12年目で、出身の岩手県で地域医療に従事し、昨年度からは現在の水戸医療センターで大腸癌をはじめとした消化器外科全般の手術を行っています。日常の診療を行う中で、専門医としての自身の手技や知識の未熟さを感じ、たとえ短期間でも high volume centerでの診療・研鑽の様子を勉強したいと考えて、がん研有明病院での研修を希望させていただきました。

研修期間中は手術見学を中心に、各科が合同で行う週1回のキャンサーボード、食道外科・胃外科・大腸外科・肝胆膵外科が集う週2回の消化器外科カンファレンス、週1回の大腸外科カンファレンス、臨床試験の班会議、部長回診、縫合結紮セミナーにも参加させていただきました。各種のカンファレンスでは、要所所で方針の根拠となるデータがスライドで明瞭に示されており、エビデンスに基づいた議論がなされていました。また、レジデントの先生方による術前や術後のプレゼンテーションは2枚程度のスライドにまとめられ、英語で流暢に発表されていました。

手術については、ロボットによる直腸癌手術、腹腔鏡による結腸癌・直腸癌の手術などを2週間で24例幅広く見学させていただきました。自分が日々苦慮している直腸のTMEや、結腸脾彎曲部の授動などを短期間のうちに繰り返して見学することができ、非常に密度の濃い勉強になりました。スタッフの先生方の卓越した手技を生で拝見し、癌の手術として基本ではありますが、郭清脂肪を取り残さず神経叢を損傷しないことが徹底されていると強く感じました。そして、それを実現するために適切な剥離の層を見極める精度・速さ、そのための視野展開、電気メスなどのデバイスを扱う職人としての技術そのものを追及する必要性も痛感しました。巨大腫瘍や局所進行腫瘍、高度癒着などの自分からは非常に困難に感じる症例でも平然と手術を進めていくのを見て、ひとつひとつの手技に特別なことはなくとも、精度の高い手技の積み重ねが高難度の手術を実現させるのだと感動を覚えました。また、レジデントの先生方は自分と近い世代の方が多く、スタッフの先生方に術中のポイントを丁寧に指導されながら質の高い手術を提供されていました。日々の業務はレジデントの先生同士で連携して効率よく進められており、空いた時間には手術の見学や動画視聴など大腸外科としての向上に努めておられました。見学中も手術手技についての議論や情報共有が活発になされており、これも技術向上に大きく寄与していると感じました。同世代の高い目的意識をもった先生方と過ごすことができ、大変刺激になりました。短期間ではありましたが、大腸癌手術についての解像度が日々向上するのを実感できた非常に有意義な研修をさせていただきました。

末筆となりますが、このような貴重な機会を与えていただきました。日本臨床外科学会会長の万代恭嗣先生、国内外科研修委員会委員長の高山忠利先生、学会事務局ご関係者の方々、茨城県支部支部長の小田竜也先生、研修を快諾いただきましたがん研有明病院大腸外科部長の秋吉高志先生、アテンドいただきました南原翔先生ならびにスタッフ・レジデントの先生方、さらに推薦いただきました水戸医療センター外科系診療部長の加藤丈人先生、不在中の業務を担っていただきました外科の先生方に深謝いたします。